

あとがき

「この日本のために何ができるのだろうか？」

二〇一一年、三月十一日、東北大地震災以降、常にこの言葉が頭のなかを巡っています。

そんななか、放射線を嫌がり、福島県南相馬市などに物資を運ぶトラック運転手が不足しているという記事を読みました。居ても立ってもいられず、仲間と支援物資を二台の車に詰めるだけ積んで飛び出しました。

そこで見た光景は衝撃でした。何度も映像で見えていましたが、実際の破壊ぶりは、同じ日本とは信じられないくらいすさまじいものでした。

また、三月終わりにもかかわらず山沿いは雪が積もり、寒さが身に応えました。

それなのに、福島の人びとは温かいのです。優しいのです。

笑顔をやささず、みなが協力して生きています。

極限の状態でも人間はこれほど優しいのかと感動しました。

ボランティアに行つたときのコンビニの店員さんも思い出に残っています。私たちが長靴にかっぱといういでたちであつたため、ボランティアとわかつたでしょう。買い物をしてコンビニを出るとき、

「ありがとうございます。ほんとうにありがとうございます」といわれました。

私はあれほど感謝の気持ちのこもつた「ありがとうございます」を聞いたことはありません。うれしさで涙が出そうになりました。

そして福島県会津地方での「山の神」との出会いが私の人生を動かししました。

六月二十六日、私は喜多方市のある小さな山間の集落に來ていました。その日、ボランティア仲間と田んぼのお手伝いとともに、地元の方々に「低線量の放射線は大丈夫です」というミニ講演会をするためでした。

ミニ集会に集まつたのは五〇人くらいだったでしょうか。「放射線の話」というテーマのせい、非常に緊張した面持ちでした。しかし、話を始めると、みなさんの緊張は次第に取れていき、最後は大きな笑顔と拍手の花が咲きました。特に印象的だったのは、八〇代くらいのおばあちゃ

ん、私の話にぶんぶんと縦に頭を振って聞いてくださり、最後は大きな笑顔とともに「先生のおかげで心配がなーんもなくなりました。ありがとう」とおっしゃってくれました。

また地区の会長さんも、

「五つくらい質問したいことがあったけれど、話を聴いていて全部解決した」と笑顔で握手をしていただけました。

この笑顔を見たとき、

「この低線量の放射線の話は、日本の笑顔のために私に与えられた使命だ」と思ったのです。

実は、以前から日本中を覆っている根拠のない不安感、これを取り去るために、

「低線量率の放射線は大丈夫である」

ということを公表することはとても大事な使命だとはずっと思っていました。しかし、同時に、これを公表することに対して大きな不安も感じていました。

世の中はとにかく放射線の不安をあおり続けています。その流れのなかで、「放射線は毒だ」、「原発反対」という言い分は「そうだそうだ!!」と合いの手を打ってもらえるのでしょうか。しかし、世間の大きな流れと逆境する「放射線は問題ないです」という話を展開すれば、「このイン

チキ医者！」、「もし放射線でなにかあったらお前が責任を取るのか」、「お前は原発推進派か」など袋叩きにあうのではないか。そんな心配が大きく心を覆っていました。

また、インターネットのユーチューブで東大医学博士の稲恭宏先生が、「私は日本を守るために命を懸けて低線量の放射線の安全性を訴える」と熱い講演会をアップしていた画像が、あつという間に削除された事実も、私の不安な気持ちを大きくしました。

しかし福島のみなさんの優しさ、温かさに触れたとき、実際福島原発事故というものが起こってしまった変えられない事実のなかで、「安心という処方箋を誰かが出さなければならぬ」と強く思いました。

そして、最後に私に大きな勇気をくれたのが「山の神」でした。

それは、ミニ講演会前、田んぼに入って、草を取っていたときのことです。私の目の前に、突如手のひら三つ分くらいある大きなカメが現れたのです。地元の人も「田んぼでこんなに大きいカメは見たことがない」と驚かれました。

私は、このカメが山の神からの使いだと思いました。

「大変な道かもしれませんが、福島に安心という勇気を与えてください。私たちはあなたを応援しています」

そしてこのカメとの偶然の出会いに大きな力をもらい、この本を書くに至りました。

この本の出版後、もしかしたら大変な批判に合うかもしれません。

でも、この本の存在が、福島の人にとって一筋の救いの光となれば、本当に良かったと思っています。

最後までお付き合いいただき本当にありがとうございました。

今回の震災で亡くなった方々のご冥福を祈るとともに、その方たちが天国から「日本は私たちの誇りと思える国に復興しましたね」といつていただけるように、微力ではありますが、自分のできることを精一杯やっていきたいと思っています。

最後に、今回の出版にあたり図表の利用を快諾していただきました近藤宗平先生をはじめとした諸先生および諸出版社様、また「放射線についての本を福島のために書きたい」という私の思いに対して、「ぜひやりましょう。先生の思いを伝えましょう」と力強く背中を押してください、また根気強く本書の刊行に力を貸してくださった古屋敷さんおよび医療科学社の皆さんに心から感謝の気持ちを送りたいと思います。本当にありがとうございました。